



~~UNMANNED~~

無人駅の芸術祭 / 大井川

Unmanned Station Art Festival, OIGAWA

2023開催報告書



NPO 法人クロスメディアしまだ [www.cms.or.jp](http://www.cms.or.jp)  
島田市日之出町 4-1-1F(C-BASE) TEL0547-39-3666

| 事業報告 | 目次 |

01 概況	…3
02 開催概要	…5
03 メインビジュアル	…6
04 アーティスト及び作品実績	…7
05 プレイベント開催	…26
06 関連イベント&プログラム	…27
07 効果として染み出していること (エピソード評価)	…31
08 協力団体・協力会社	…38
09 広報	…39
10 来場者数	…46
11 来場者アンケート	…47

別添 小冊子「いのちを知る旅の杖として」(森繁哉 / 「大地懺悔」)

# 01 概況

無人駅を現代社会の象徴と捉え、アートを手法に地域をあらわし発信するプロジェクト「UNMANNED 無人駅の芸術祭／大井川 2023」(以下、無人駅の芸術祭)が2023年3月19日をもって閉幕した。6回展となる今回は13組の作家により合計21作品を制作展示し、各イベントプログラム等を開催した。会期中は全国各地に加え台湾や韓国といったアジア各国からも多くの来場者があった。

今回は新たな取り組みとして、JR 島田駅周辺を「まちなかエリア」と設定し中心市街地と中山間地域を連結させるプロジェクトや、抜里エリアに「アート回廊」を整備した点などがあげられる。

まちなかエリアには3作品を設置した。昨秋の台風15号の影響で分断される金谷・川根間のアクセスに対し、島田駅を起点に山間地と結ぶルートを構築した。関口恒男の「島田レインボーハット」では島田駅前広場を木製のハット(小屋)に照らされる虹とともに太古からの人間の本能に立ち返るような空間に変えた。さとうりさは、たくましく生きる女性をあらわすブルーの大きなオブジェ作品「メダム K」で、駅前通りの空き店舗を開示し街中の景色を一変させた。

芸術祭主要エリアである抜里エリアでは通年で「アート回廊プロジェクト」を立ち上げ、ハイキングルートの整備と作品設置を行った。寺山(通称ぼいんぼいん山)山頂には、ヒデミニシダの「境界のあそび場Ⅳ／音の要塞」が登場し、大井川流域で古くから対岸との物流や人の行き来など『交信』の努力をしてきた人々へのオマージュが込められた。さとうりさ「本人」は山の形を180分の1スケールで成形し、座面位置と一致させた座標に設置することで、自身の現在地に立ち返ることのできる作品を設置した。「アート回廊」により、住民しか知らなかった絶景がひらいた。作品は会期後も地域と共に管理していく。

コロナ禍や台風という予期できず、抗うことのできない自然やウィルスの猛威。現代社会は予測不可能なことの連続で成り立っているとも言える。そんななか、上野雄次は作品「まつる」にて、大井川流域のうねりの象徴的な部分に25本のフラッグを立てていくという壮大なアートプロジェクトを実施した。ピンク色の旗が立つと、「宗教か」「お祭りか」と地域はざわざわした。この感情そのものも予測不可能なものであり、どう捉えるかで変わるものである。説明がないから嫌だという人、アート作品だとわかって面白がってくれる人、地域の幸せの旗だ、と解釈してくれた人、実に様々な反応があった。アートは美しいだけではなく、問題提起ができるものであり、作品をどう感じていかは鑑賞者にゆだねられていくことを実感した。

今回も多くのサポーターや住民に協力をいただいた。特に抜里エコポリス及び抜里町内会の皆さまの多大な協力は、欠くことのできない芸術祭を動かす重要なエンジンとなっている。作品の根幹となる土台や基礎を作りや下準備を制作チームとして進める姿や、会期を通じた作家や来訪者との関わりには感動をおぼえる。サポーターには週末ごとに福岡から活動へ参加してくれた方もいた。家を会場として貸してくれた持ち主は作家との交流や制作に打ち込む姿勢を見て感じた気持ちを素敵なメッセージとしてしたためてくれた。このような様々な交流や変化が、地域自体の受け皿が大きくなっていく化学反応とも言える。

無人駅の芸術祭の会期を越えて、アートが少しずつ地域の日常に染み出している。日々の中に小さくとも光を見出して笑顔が増えるような地域づくりを今後もアート、芸術祭を軸に行っていきたい。なによりも、作品の制作や設置、会期の運営など、多大な支援をいただいた多くの方に感謝を申し上げる。

## 02 開催概要



UNMANNED 無人駅の芸術祭/大井川 2023

Unmanned Station Art Festival, OIGAWA 2023

会 期 2023年2月23日(木・祝)~3月19日(日)  
計25日間

会 場 大井川鐵道の無人駅とそこから広がる集落、川越し街道、JR 島田駅周辺  
(静岡県島田市・川根本町)

参加作家 計13組:(設置場所の駅名は駅舎でなくエリア)  
<大井川鐵道無人駅>カ五山(日切)、上野雄次(神尾)、内田慎之介(抜里)、木村健世(抜里)、さとうりさ(抜里)、ヒデミニシダ(抜里)、TAKAGIKAORU(抜里)、森繁哉(抜里)、形狩りの衆(抜里)、丸山純子(塩郷)、歪んだ椅子(青部)  
<JR 島田駅周辺>関口恒男、さとうりさ、ふじたともこ  
<川越し街道>カ五山

主 催 NPO法人クロスメディアしまだ

支 援 アーツカウンシルしずおか

協 力 大井川鐵道株式会社、島田市、川根本町

助 成 等 福武財団「アートによる地域振興助成」  
島田市「アートによる地域づくり推進事業」  
文化庁「ARTS For The Future! 2」(キックオフイベント)  
経済産業省「令和4年度 デジタルツール等を活用した海外需要拡大事業  
(アーティスト等と連携した地域ブランドの確立に係る実証事業)」委託(まちなかエリア)

公式サイト <http://unmanned.jp/>

運営事務局 UNMANNED 無人駅の芸術祭/大井川 運営事務局(NPO法人クロスメディアしまだ)  
静岡県島田市日之出町4-1-1F(C-BASE) TEL:0547-39-3666

※支援



※助成



## 03 メインビジュアル

無人駅から広がる集落に暮らす人々とともに、アート作品をイメージさせるメインビジュアルに展開した。ポスターやパンフレットの印刷物、公式サイトなどに展開し、芸術祭の魅力伝える重要なコミュニケーションツールとなった。

### メインビジュアル(ポスター)



### 公式ウェブサイト



## 04 アーティスト及び作品実績

計13組のアーティストが参加し、作品や表現の発表を行った。

(女子美術大学プロジェクトを含めると14組)

	アーティスト	作品タイトル	作品設置場所(エリア)
1	上野雄次	「バンブーハウス」「まつる」	旧駅舎(神尾駅)、大井川流域の各所(神尾駅～千頭駅)
2	内田慎之介	「NUKURI HEROES」	ヌクリハウス(抜里駅)
3	形狩りの衆	「ひとつになる先輩たち」	天野邸(抜里駅)
4	木村健世	「無人駅文庫」	ヌクリハウスにて販売(抜里駅)
5	さとうりさ	「本人」 「メダム K」 「くぐりこぶち」 「地蔵まえ4(縫い合わせ)」 「地蔵まえ3(サトゴシガン)」	寺山(抜里駅) 島田駅前通り(JR 島田駅) しまの竹やぶ(抜里駅) 茶畑内(抜里駅) 駅舎(抜里駅)
6	関口恒男	「島田レインボーハット」	JR 島田駅北口広場(JR 島田駅)
7	TAKAGI KAORU	「自身の器の裏側」	元鈴木家(抜里駅)
8	ぬくりアート回廊 × 女子美術大学	「風景を聴く」ための4つの作品シリーズ	寺山ルート各所(抜里駅)
9	ヒデミニシダ	「境界のあそび場Ⅳ／音の要塞」 「境界のあそびばⅡ／ちゃばらのカーテン」	寺山山頂(抜里駅) 抜里駅前茶畑(抜里駅)
10	ふじたともこ	「夏虫色にたゆたう」	Cビル1F(JR 島田駅) 抜里八幡神社(抜里駅)
11	丸山純子	「ひかりとり」	三津間集落・石間家(塩郷駅)
12	森繁哉	「一カ所の芸術 ひとりひとりの芸術」 春彼岸の里遊び(遊行の地図を片手に、)	抜里集落のさまざまな場所(抜里駅)
13	歪んだ椅子	「Our Lovely Red Stones, Our Lovely Small Worlds」	青部駅舎及び逢おう丘(集落内)(青部駅)
14	カ五山	「渡る願い」 「表参道—願いをつなぐ—」	川越し街道川会所(川越し街道) 日切駅及び日限地蔵尊境内(日切駅)

アーティスト 上野雄次

作品タイトル まつる

作品設置場所 大井川流域の各所

大井川鉄道終着駅である千頭から神尾駅までの区間の大井川。急流により長い年月をかけて削られた独特な地形の中で象徴的な場所にフラッグを立てることで、流域の稀有な地形とそこに育まれた人々の命の存在をつなぎ合わせて可視化するプロジェクト。大井川流域を花器と見立て、そこに花を活けるような意味合いも込める。



アーティスト 上野雄次  
作品タイトル バンブーハウス  
作品設置場所 大井川鐵道神尾駅

老朽化した旧駅舎に、地域に群生する竹を積層させた覆屋を設け、お茶室のようなトリップ空間へと変容させる。入口をくぐって竹の通路を辿ると、そこには異空間が現れる。正面には神尾山の荒々しい山肌とトンネルを見渡す独特の景観を望むことができ、非日常の体験を味わうことができる。

トンネルの隙間からは山の青々とした木々や空が見え隠れし、来訪者は心地よく誘導されながらホームへと辿ることができる。



#### ■パフォーマンス「花いけ合戦 島田大会」

日時:2月25日(土)、26日(日) 13:30~15:00 ごろ

場所: 抜里地域交流センター 料金: 無料



アーティスト 内田慎之介  
作品タイトル NUKURI HEROES  
作品設置場所 ヌクリハウス(抜里エリア)

2018年よりはじまった当芸術祭において、作家との交流を重ねてきたヌクリハウス。この襖をキャンバスに、実在する抜里の人々が登場人物となり、抜里を襲う脅威と戦うヒーロー漫画を描き無人と呼ばれる場所で豊かにいきいきと暮らす人々の新たな物語をつむぐ。※3月3~5日にライブペイントを開催し作品完成を目指す。



■内田慎之介×マンガライブペイント

日時:3月3日(金)~5日(日) 10:00~16:00

場所:ゲストハウス・ヌクリハウス



アーティスト 形狩り衆  
作品タイトル ひとつになる先輩たち  
作品設置場所 天野邸(抜里エリア)

昨年、小学校を会場にした「顔の家 駿河徳山」を行い、学校統廃合という切実な課題に触れた。もっと子どもたち自信と学校のために何かできないか話し合う内、川根本町の小中学校全 6 校を 1 年かけて巡回する展覧会「ひとつになる展」構想に発展(脱線)した。今回は、過去 3 年間のライフマスク 57 面に、この特別活動「ひとつになる展」出品作から 6 点を加えた報告展。



アーティスト 木村健世

作品タイトル 無人駅文庫

作品設置場所 ヌクリハウスにて販売(抜里エリア)

無人駅にある集落に住む人々に駅にまつわる記憶を聞き取り、「無人駅文庫」として 2018 年より毎年発表してきた。これまで行ってきた福用、駿河徳山、抜里、塩郷、下泉の 5 つの無人駅にふりつもった物語を今回、特別アーカイブボックスとして発行、販売する。これまで取材してきたたくさんの人々の物語の中には、きっとあなたに似た物語があるはず。



アーティスト さとうりさ

作品タイトル 本人

作品設置場所 寺山(通称ぼいんぼいん山)(抜里エリア)

寺山(通称ぼいんぼいん山)を約 180 分の1スケールで形成し、見て・触って・座れる作品。設置位置は作品上の座面位置とほぼ一致する。風景を眺め、山のかたちに触れ、自分の“現在地”を確認する時間が、日々の小さな混乱をわずかに静め、それぞれの“今”をクリアにしてくれる。かもしれない。もっと本人になれる。かもしれない。“わたしはここにいる”



アーティスト さとうりさ

作品タイトル メダム K

作品設置場所 島田駅前通り(JR 島田駅エリア)

横浜市の「黄金町バザール 2011」のために制作、かつて違法飲食店が立ち並んだ高架下に展示。タイトルはそこで働いていた女性たちを意味し人の形はしているが、女性を示す記号的要素はない。娼婦という職業に対する一辺倒のイメージから自由になれたらいいのという考えが制作のきっかけとなっている。金沢 21 世紀美術館での展示を経て島田駅前に姿を現す。



アーティスト さとうりさ  
作品タイトル くぐりこぶち  
作品設置場所 しまの竹やぶ(抜里駅エリア)

現在では禁止となっている野鳥を獲るための罠「こぶち」を、生き物たちのエネルギーが交差していた場所として捉え、やぶのなかにインスタレーションを制作。「くぐりこぶち」を通り抜けたとき、ほんの少し世界が変わって見えるかもしれません。



アーティスト さとうりさ  
作品タイトル 地蔵まえ4 縫い合わせ  
作品設置場所 抜里の茶畑の中(抜里駅エリア) 協力:抜里エコポリス

これまでの「無人駅の芸術祭」のなかで制作したオブジェ作品が、地元の方々の協力を得てバルーン作品となって現れます。オンライン対話と配送を駆使した協働制作は、私たちにどれくらいの達成感を与えてくれるのでしょうか。またそれはどんなふうに見る人へ伝わるのでしょうか。



アーティスト さとうりさ  
作品タイトル 地蔵まえ3 サトゴシガン  
作品設置場所 大井川鐵道 抜里駅駅舎

「パブリックアートもお地蔵さんのように地域に馴染むのは可能か。」

というテーマで3回目の参加となる今年は、ご家庭でオブジェ作品を預かってもらうプロジェクト「サトゴシガン(里子志願)」を20年ぶりに実施。

果たしてパブリックとプライベートの境界線はどこに？



アーティスト 関口恒男

作品タイトル 島田レインボーハット

作品設置場所 JR 島田駅北口広場(JR 島田駅エリア)

ハット(HUT)とは質素な小屋を意味し、プリズムで太陽光を反射し内部に虹(スペクトル)を投影。原始人が焚火集まり踊っていたような場所を、焚火の代わりに虹を使い、踊れる空間を作る。レインボーハットはダンサーが観客に見せるために踊る場所ではなく、それぞれが自分自身を理解するために踊る場所である。また同時に踊らなくてもいい場所である。

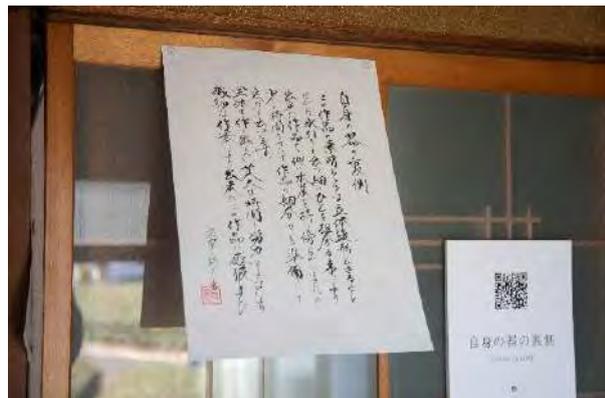


アーティスト TAKAGI KAORU

作品タイトル 自身の器の裏側

作品設置場所 元鈴木家(抜里エリア)

例えば「器」に表と裏があるのだろうか。空き家だった元鈴木家という器の裏側のような領域と作家の「内なる器」が触れ合うことで、見る人は自身の内側についても直視せざるを得ないのではないか。空き家に残る生活の面影、その空き家を開いてくれた持ち主の気持ちの変化。そういう器の裏側のようなものが作家を通して変容していく過程を表現する。



アーティスト ヒデミニシダ

作品タイトル 境界のあそび場Ⅳ/音の要塞

作品設置場所 寺山(ぼいんぼいん山)山頂(抜里エリア)

大井川流域では、古くから対岸との物流、人の行き来、情報交換のために様々な工夫がされてきた。この要塞は「交信」の努力をしてきた人々へのオマージュ。自動車での行き来が容易になり、大量の情報を瞬間のうちに交換できるようになったいま、我々の感覚はこの要塞からどんなメッセージを発信し、目の前の風景からどんな返答を受け取るのだろう。



アーティスト ヒデミニシダ

作品タイトル 境界のあそび場Ⅱ/ちゃばらのカーテン

作品設置場所 抜里駅前茶畑(抜里エリア)

茶畑の一角にひらひらと漂う大きなカーテン。

その下には円形のベンチが設えられ、抜里の風景を訪れる人々の休息の場となります。

茶畑の空に漂う薄く柔らかな布地の向こうには世界の輪郭が浮かび上がり、はためく裾から見え隠れするその端々に、世界の細部がきらめくでしょう。



■特別企画: ぬくりアート回廊 × 女子美術大学

作品タイトル 「風景を聴く」ための4つの作品シリーズ

作品設置場所 寺山(ぼいんぼいん山)ルート各所(抜里エリア)

ぬくりアート回廊プロジェクトとして、女子美術大学ヒーリング表現領域、アートプロデュース表現領域の学生 10 名が、ハイキングコース各所に作品を設置。現地調査や地域との交流を経て「風景を聴く」ための作品を 4 班に分かれて提案・制作した。



アーティスト ふじたともこ

作品タイトル 夏虫色にたゆたう

作品設置場所 Cビル1F(島田駅エリア)、抜里八幡神社(抜里エリア)

まちなかでの屋内作品と、里山での屋外作品が呼応することで化学反応と光の波長を人が制御するようになった世の中で、自然の中の小さな生命力を表現。2022年空きに静岡県を追った台風15号により絶滅の危機に瀕した抜里地区上手川での蛍の森づくり。前向きに復旧した地域の人たちと、厳しい環境の中たくましく生きる蛍をオマージュした光の演出作品。



アーティスト 丸山純子

作品タイトル ひかりとり

作品設置場所 三津間集落・石間家(塩郷エリア)

制作場所はかつて茶工場として使われていた場所。茶工場に残されたもの、現地で集められたレジ袋でつくられた花、廃油石鹼を使ったイメージなどを組み合わせなおし、旧茶工場に新たな風景を作る。



■丸山純子 お花づくりワークショップ

日時:2月19日(日)13:30~

場所:三津間集会場



アーティスト 森繁哉

作品タイトル 「一カ所の芸術 ひとりひとりの芸術」春彼岸の里遊び(遊行の地図を片手に、)

作品設置場所 抜里集落のさまざまな場所(抜里エリア)

舞踊作家であり民俗学者でもある森繁哉が 2018 年よりスタートした本芸術祭における芸術家と地域の人々の関わり方、受け取り方こそが芸術と捉え、“わけあい”の疑似体として芸術祭が機能している形を、地域の風土、記憶、人の営みとともに表現。3月11、12日の二日間にわたり抜里集落の各所で、「門付け興行」「直会の言葉宴」「大地懺悔」「裏山の宴」を行う。

「大地懺悔」の際には集落の人に聞き書きしまとめた小冊子「いのちを知る旅への杖として」を配布し、集落を歩き、説明を受けながら舞踏鑑賞を行った。同小冊子は報告書後半に添付。

■3月11日(土)



■3月12日(日)



■3月12日(日)16:00～ 松村知紗ソロダンス公演「わたしのお母さん」

場所: 抜里地域交流センター



アーティスト 歪んだ椅子

作品タイトル Our Lovely Red Stone, Our Lovely Small World

作品設置場所 青部駅舎及び逢おう丘(青部エリア)

大井川田で採取される「赤い石」と伝承をもとに、架空の赤い石を信仰する人たちを設定し、何かを信じることで生まれるストーリーや作られたものを、ラジオやポスターなどで構成したインスタレーションとして駅舎とその周辺に展示。それぞれの信仰内容は重要ではなく信仰行為の機能と、その機能に活かされる人たちが点在する一つの様相を描くことを試みる。



アーティスト 力五山(加藤力・渡辺五大・山崎真一)

作品タイトル 表参道—願いをつなぐ— / 渡る願い

作品設置場所 日切駅及び日限地蔵尊境内(日切エリア) / 川越し街道川会所(川越し街道エリア)

川越し街道における「わたる願い」の展示(駿河側)とともに日切駅から日限地蔵尊を結ぶ「表参道」の展示(遠州側)を行う。作家は駿河と遠州を往復しながら日限地蔵尊が地域の人々に信仰される姿に感銘を受ける。大井川橋、蓬莱橋の美しさと歴史的な重み、人々をつなぐ姿を感じる。駿河と遠州の間の「願い」を渡す姿、橋への気概。人足たちの熱気や情緒を改めて表現。川はへだたりを作るものだが、逆に結びつきを強くするものなのかもしれない。



## 05 キックオフイベントの開催

第6回会期となる2023年2月～3月開催に向けアーティストによる地域へ滞在と作品制作のスタートを起点としたキックオフイベントを開催。また芸術祭から生まれた新たな拠点「ヌクリハウス」のお披露目も同時に開催。

■会場:アトリエゲストハウス「ヌクリハウス」(島田市川根町抜里 930)

■日時:2022年12月17日(土)13:00～

■イベント内容:

○芸術祭2023企画発表

○トークイベント『アートが取り戻す地域の誇り』

登壇者:関口正洋(株式会社アートフロントギャラリー)、櫛野展正(アーツカウンシルしずおか)、さとうりさ(美術作家)、大石歩真(無人駅の芸術祭主催)

○ごった煮ミーティング(芸術祭交流会)

○アーティスト「内田慎之介」ライブマンガペイントのパフォーマンス



## 06 関連イベント&プログラム～アートプラット／大井川 =====

「UNMANNED無人駅の芸術祭／大井川」の開催にあわせた市民登録型の小規模イベントを集約させるプラットフォーム事業として『アート・プラット／大井川』を開催した。プログラム企画作りの伴走支援、広報や受付支援を実施することで、多くの団体や個人、店舗が参画した取り組みとなった。

### アート・プラット／大井川

#### ■ 開催趣旨

『アート・プラット／大井川』とは、街中から里山まで、お店や施設などで開催する、文化的な活動や取り組みを集めて紹介する市民登録型のプラットフォーム事業。UNMANNED無人駅の芸術祭／大井川の開催期間にあわせ、大井川流域地域の、小規模文化団体の育成・支援を目的に、広報協力、事務局業務代行、企画立案から実現に向けたサポートを行うことで、市民の主体的な参画を促進し、大井川流域地域における芸術文化の振興と活力あふれる地域の実現を目指します。

#### ■ 事業目的

1. 大井川流域地域における文化芸術の振興
2. 大井川流域地域における文化芸術の鑑賞機会の充実
3. さまざまな芸術表現の発表機会の提供
4. 大井川流域地域における集客交流人口の多様化

#### ■ 実施プログラム(公式プログラム)

	プログラム名	日時	開催場所	企画者	参加者数
1	花いけ合戦島田大会	2/25(土)、 2/26(日) 13:30～15:00	抜里地域交流センター	NPO 法人クロスメディアしまだ (上野雄次)	185名
2	内田慎之介×マンガライブイベント	3/3(金)～ 3/5(日)	ゲストハウス・ヌクリハウス	NPO 法人クロスメディアしまだ (内田慎之介)	約500名
3	ヌクリ・アートスクール①芸術祭サポーターを学び共に活動しよう 「大地の芸術祭に学ぼう・芸術祭を支えるサポーターの魅力」	2/26(日) 10:30～12:00	ゲストハウス・ヌクリハウス	NPO 法人クロスメディアしまだ	12名
4	ヌクリ・アートスクール②アート×食×∞！ツアーを学び作ろう 「大地の芸術祭に学ぼう・地域の魅力を引き出すツアーの作り方」	3/5(日) 13:00～14:30	ゲストハウス・ヌクリハウス	NPO 法人クロスメディアしまだ	16名
5	ヌクリ・アートスクール③静岡県内の地域づくりトッパンカ一集結 「久しぶりの豪華集結！次世代 NPO サミットが語り尽くすこれからの地域づくり」	3/7(火) 19:00～21:00	ゲストハウス・ヌクリハウス	無人駅の芸術祭×次世代 NPO サミット	8名

6	“ぼいんぼいん山”アートハイキング	3/4(土) 12:00~14:00	集合場所: 川根茶めぐり園	めぐりアート回廊プロジェクト ( 抜里エコポリス、クロスメディアしまだ)	30名
7	ふじのくに旬を食べ尽くす会×芸術祭 「アート×ガストロノミーリズム! 大井川流域のアートと食をめぐる」	3/18(土)、 3/19(日)	集合場所: <昼の部> JR 島田駅北口 <夜の部> 磯藤	無人駅の芸術祭×ふじのくに旬を食べ尽くす会	40名

### ■実施プログラム(企画者開催)

	プログラム名	日程	開催場所	企画者	定員数
1	メールアートであなたを表現してみよう!	2/24(金)~ 2/26(日)、 3/1(水)~ 3/3(金)	ゲストハウス・ヌクリハウス	あおべさとのからし 佐藤美和	各20名
2	お茶柄スタンプで手ぬぐいを作ろう☆	3/17(金)~ 3/19(日)	しまだきものさんぼの店ギャラリー	恋衣洋裁倶楽部 渡邊美和	各4名
3	家族向け! 気軽に楽しむ手持ち花火&花火アート体験	2/25(土)	めぐりスポーツ広場	(株)神戸煙火工場	20名
4	はじめてのヨガ	2/23(木) ①9:00 ②10:30~	SAE YOGA スタジオ	SAE YOGA 水谷小枝	各6名
5	無人駅の芸術祭を語り合おう	3/5(日)	NPO シマシマ		中止
6	和太鼓を体感してみよう!	毎週月曜日	さんろく太鼓	鈴木	各10名
7	アロマってこうやってできるんだ! がわかるアロマ蒸留体験	①2/25(土) ②3/25(土)	① シリポツケ養蜂園 ② いっぷく茶処やませき	銀の山 希代智子	各8名 ※2/25 中止
8	自分だけの陶芸作品を創ろう	陶芸教室開講日	ささやき窯	ささやき窯 村松博義	各6名
9	踊る! 弾む! 母部のダンス会	3/2(木)	ローズアリーナ軽体操室	踊る! 弾む! 母部 松浦優子	8名
10	水の恵み体感ツアー 植栽体験&ダム周辺で遊び学ぼう!	3/4(土)	大井川鐵道井川線長島ダム駅前駐車場	一般社団法人エコティかわね	60名
11	「ママをやめてもいいですか! ?」上映会	2/23(木)、 2/24(土)	ぴ〜ファイブ音楽広場	島田市子育て支援ネットワーク	各30名
12	ばらの丘公園で作ろう! ジャイアントフラワー	3/11(土)、 3/12(日)	島田市ばらの丘公園	島田市ばらの丘公園	なし
13	朝顔の松公園&川越し遺跡 de マルシェ	2/23(木)	川越し街道	一般社団法人しまだきものさんぼ 小澤京子	なし
14	オリジナルカード ワークショップ	2/23(木)	川越し街道	et.rie(エトリエ) 大手理瑛	なし
15	島ママ Dream マーケット	3/11(土)、 3/12(日)	島田市北中学校跡体育館	島ママ Dream ~ママの夢をカタチにする会~	なし
16	川根本町の美味しい郷土料理「大根そば」を食べよう!	主に日曜	恋がね茶屋	くのわき大根そば研究会	なし

17	小学生向き プログラミング&英語レッスン	2/28(火)、 3/7(火)、 3/14(火)	夢づくり会館	クラブ SOJI 小澤亮司	各 4 名
18	島田市立図書館でアート特集！	2/23(木)～ 3/19(日)	島田図書館、金谷図書館、川根図書館	島田市立図書館	なし
19	ココミラ島田「ミニみんなの文化祭 in フェスタしまだ」	3/4(土)、 3/5(日)	プラザおおるり	ココミラ島田	なし
20	和みヨガ	3/10(金)	nue coffee	小林和佳子	6 名
21	小学生から参加可能☆お茶 UFO パンづくり	2/23(木)	しまだ楽習センター 料理講習室	秋田美八子	8 組
22	朝活(ディスコダンス)	3/3(金)	しまだ楽習センター	小林和佳子	10 名
23	朝活(朝ヨガ)	3/3(金)	しまだ楽習センター	小林和佳子	10 名
24	あれこれ講座 Season11 『島田の文化芸術活動～蘭契会』	2/5(日)	しまだ楽習センター	島田近代遺産学会	50 名
25	あれこれ講座 Season11 『大井川流域に芽生えた産業製紙会社の歴史』	2/18(土)	しまだ楽習センター	島田近代遺産学会	50 名
26	あれこれ講座 Season11 『海軍島田実験所に携わった人々』	3/11(土)	しまだ楽習センター	島田近代遺産学会	50 名
27	あれこれ講座 Season11 『島田実験所その後の平和利用・島田理化工業』	3/18(土)	しまだ楽習センター	島田近代遺産学会	50 名
28	身体の仕組みを知ってご機嫌な心身になろう！	3/2(木)	luxury salon SATINE	luxury salon SATINE 新聞ゆみ	中止
29	第 90 回企画展 たゆたう刃文 きらめく沸	1/14(土)～ 3/19(日)	島田市博物館本館	島田市博物館	なし
30	遊び心 ころころ	12/17(土) ～3/26(日)	島田市博物館分館	島田市博物館	なし
31	音楽の絵本 ダブルクインテット	3/18(土)	プラザおおるり	(株)まちづくり島田	600 名
32	だれでもロビーコンサート	2/23(木)	プラザおおるり	(株)まちづくり島田	なし
33	大井川鐵道駿河徳山駅「鹿ん舞」PR プロジェクト	2/23(木)～ 3/19(日)	大井川鐵道「駿河徳山駅」駅舎入り口	静岡県立川根高校 地生学 (伝統芸能・文化分野)	なし

## ■実施プログラム紹介(抜粋/公式プログラム)

### <ぼいんぼいん山アートハイキング>

日時:3月4日(土)12:00～14:00 場所:川根茶めぐり園(集合)

ヌクリ集落の通称「ぼいんぼいん山」は集落の人しか知らなかった絶景があるのどかな山。ヒデミニシダ、さとうりさ、女子美術大学大学生によりアート作品を鑑賞しながらガイドとお弁当付きハイキングを楽しむ。



<ガストロノミーツアーリズム>

日時:3月18日(土)、19日(日) 集合場所:JR島田駅北口

生産者と料理人と消費者が連携した「食の会」を開催し、生産者や料理人からの話を聞きながら、その日にしか出ない特別なメニューを楽しむ「静岡旬を食べ尽くす会」とのコラボ企画として、アートと楽しむ大井川流域ツアーを開催。大井川流域食材を使った今回限りの特別なお弁当を楽しみながら、ガイド付きで作品を巡った。



■実施プログラム紹介(抜粋/企画者開催)

プログラム名:メールアートであなたを表現してみよう!

日時:2/24(金)、2/26(日)、3/1(水)、3/2(木)、3/3(金) 場所:ゲストハウス・ヌクリハウス



はじめてのヨガ

日時:2月23日(木祝) 場所:SAE YOGA スタジオ



お茶柄スタンプで手ぬぐいを作ろう☆

日時:3月17日(金)、18日(土)、19日(日) 場所:しまだきものさんぽギャラリー



家族向け! 気軽に楽しむ手持ち花火&花火アート体験

日時:2月25日(土) 場所:抜里スポーツ広場



小学生向き プログラミング&英語レッスン

日時:2月28日(火)、3月7日(火)、3月14日(火) 場所:夢づくり会館



「ママをやめてもいいですか!？」上映会

日時:2月23日(木祝)、24日(土) 場所:ぴ〜ファイブ音楽広場



ココミラ島田「ミニみんなの文化祭 in フェスタしまだ」

日時:3月4日(土)、5日(日) 場所:プラザおおるり



大井川鐵道駿河徳山駅「鹿ん舞」PRプロジェクト

日時:2月23日(木祝)~3月19日(日) 場所:大井川鐵道駿河徳山駅駅舎入り口



## 07 エピソード評価(効果として染み出していること) =====

### 事業の地域資源・社会課題への対応度合いに関するエピソード

#### 【アートにより開かれたぼいんぼいん山】

主要エリアである抜里集落に、茶農家しか行くことのない寺山(通称ぼいんぼいん山)がある。アクセスの悪いぼいんぼいん山はそこで栽培を続ける農家も減少しており、道は荒れる一方だった。今回作家との話の中で寺山の話になり、「抜里アート回廊プロジェクト」が立ち上がった。ぼいんぼいん山のハイキングルート整備と通年での作品展示を行った。山の整備と通年での作品展示は地域住民側が喜んでくれ、多くの住民が関心を寄せた。道の整備、看板表示、危険個所の修繕などは、抜里エコポリスをはじめ、サポーターも協力して取り組んだ。



#### 【ツアー及びまちなかエリア】

昨年10月の台風15号の影響により、国道473号線の通行止め、大井川鉄道家山-千頭間の代行バス、また抜里エリアには代行バスも来ないというアクセスが非常に悪いという課題を抱えてのスタートとなった。それを解決するためにJR島田駅周辺(まちなかエリア)に作品設置を行い、週末ごとにツアーを出すことで、アクセスの悪さという課題解決を図った。ツアー開催時にはバスの中で、地域の成り立ち、大井川鉄道と大井川の関係、過去の水返せ運動、大井神社の歴史等々、芸術祭や作品説明だけでなく、地域の説明も丁寧に行うことで、当該エリアの課題や魅力に触れやすくなる工夫を行った。また、まちなかエリアでは、空き店舗に作品を展示、夜間もライトアップを行うことで、遊休不動産の開示とエリアの魅力増加を図った。



#### 【観光協会とのコラボ】

道路及び鉄道のアクセスの悪さを解消するために、島田市観光協会と電動アシスト自転車のレンタルを協働で行い、仕組みを構築することができた。自転車受け渡しについては、家山駅前の茶屋が担い、家山エリアでのお買い物券付きとするなど、良い形とすることができた。今後活かしていきたい。



### 【学びの場づくり】

芸術祭を作品鑑賞の場とするだけでなく、学びの場づくりという新たな機能を付加した。芸術祭にまつわるツアーやサポーターの先進事例を学ぶ場をはじめ、静岡県内の地域づくり、尺八と祈りの場、集落の暮らしや地形などを学ぶ場を創出した。

ヌクリハウスを拠点に「ヌクリアートスクール」というシリーズでモデル的に展開を行った。今後も会期を超えてシリーズ化していきたい。効果を感じるのは、抜里エコポリスの主要メンバーが学びに参加してくれたことである。70代男性たちが、力作業だけでなく、学びはじめていることは大きな収穫であると考えている。



### 事業の波及効果に関するエピソード

#### 【集落の担い手の増加】

波及効果として特筆すべきは、「抜里エコポリス」にメンバーが新たに増えたことである。これまで遠巻きに活動を見ていた集落の50代後半の男性が(芸術祭の取組が面白そうだから)エコポリスに加入したい。と申し出てくれた。中山間地域は濃密なコミュニティの中、固定化されやすい関係値で活動が進むこういった団体で、同じ集落内でメンバーが増えることは非常に大きなことだと考える。また、会期前から1か月半にわたり毎週末、福岡からサポーター活動をしてくれた40代男性がいる。エコポリスメンバーと共に活動する中で、作家を超えて地域との関わりが強くなり、彼もエコポリスメンバーの一員としてメンバーに認識され活動を共にしていった。



#### 【全国・海外からの来場者】

コロナ禍が明け、旅行等移動が再開され始めていることの影響も大きいですが、今回は全国各地から非常に多くの来場者があった。メイン会場の抜里は大井川鉄道が運休し、バスも来ないエリアであったが、毎週末は駐車場が停まらないほどの満車であり、同駅で週末に活動を行う「さよばあちゃんの休憩所」も大変賑わっていた。また、台湾や韓国からの来場者もあり、少しずつではあるが当芸術祭が海外でも認知されていることを実感した。富士山しずおか空港との連携含め、アジアからの集客も視野にいれていきたい。

#### 【さまざまなメディアとの関わり】

新聞、webメディア等様々に掲載いただくことで取組の周知を図ることができた。

記事としては、芸術祭開幕だけでなく、「抜里アート回廊(ぼいんぼいん山)」の取組について、当法人ではなく、地域住民が取材を受けたこと(静岡新聞)、また海外に向けて当芸術祭の記事が全国発信されたことも大きな成果と考える(読売新聞 The Japan News)

### 【まちなかエリアの登場】

今回、初のエリアとなるJR島田駅周辺が加わった。3 作品の展示のうち 1 作品は「開幕初日から制作を始める」というスタイルを取った。このことにより、これまで関わりを持ちづらかった「まちなかエリア」の市民が芸術祭自体の取組を知り、新たな来場者になり、今後はサポーターとして参加したいという声があがった。当芸術祭はこれまで市内中山間地を主なエリアとしてきたためこれまで取り込めていなかった層の獲得につなげることができた。



### 【上野雄次「まつる」へのプロセス】

事業の波及効果として、作品としてけん引したのは、上野雄次／まつるであった。この作品は、大井川のうねりの象徴的な場所に、15 メートルの竹で制作したフラッグを立てることで、無人と呼ばれる場所に住む人々の存在を可視化したものである。また華道家でもある上野は、大井川流域を花器と捉え、そこに花を活けていくという意味も込め合計 25 本の旗が立ち上がった。

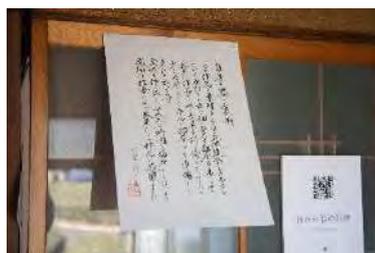
この作品は、持ち主の特定、許可、旗の設置とかなり大がかりなものであったのだが、旗が立っていくとエリアを超えて地域が「ざわつき」、市役所や町役場には問合せが多数、集落の中でも様々に話題に上がった。「宗教」「工事」「お祭り」など想像の仕方、受け取り方は非常に様々であり、マイナスの意見もプラスの意見も、面白がってくれる人も、最後まで受け入れられない人もいた。個人的な主観になるが、全ての人に受け入れられ、全ての人が良いと思うことなどなく、地域がざわざわする、ということも意義あるアートの役割であると考えられる。わからないことをどう捉えるか。ということでは広域にわたって一石を投じたこの作品は事業の波及効果に一役買ったといえる。「この旗は毎日目に入るから幸せの旗だと思うよ」という解釈をしてくれた集落の 70 代男性の言葉が一番うれしかった。



### 【TAKAGIKAORU「自身の器の裏側」へのプロセス】

中山間地は確かに空き家が増加しているが、プライベートな空間であり、朽ちていたり物がそのままになっている空き家に持ち主は「恥ずかしい」と感じるようで、貸してもらえるには信頼関係や、気持ちをほぐし、取組を理解してもらえないとなかなか進まない中、3 年間打診しても貸してもらえなかった空き家を借りる事ができた。その会場で作品制作と展示を行ったのが TAKAGIKAORU であった。深夜まで制作を続ける姿と、20 年にわたり編み続けている水引の作品の制作方法や想いに感銘を受けた持ち主の方は、会場入り口にメッセージをした

ためてくれた。こういう化学反応こそが波及効果と呼ぶと考える。作家とこの持ち主の方の交流は今後、継続的に続きながら年間を通したWSなどの予定が話し合われている。



## 包摂的な仕組み・包摂に向けた工夫に関するエピソード

### 【ゆうやくんの変化】

昨年から作品会場として倉庫を借りている家のゆうやくん。少し障害のある40代男性である。相互のコミュニケーションは取ることはできず、奇行ととれる行動がたまにあり、集落の人と関わることはほとんどなかった。昨年からはゆうやくんは変化をしていき、いろいろな人と話をするようになり、芸術祭にもゆうやくんの「好き」を活かす形で関わってくれるようになった。ゆうやくんは、古い大井川鉄道のチラシを持参し我々とコミュニケーションをとる、花いけ合戦で使用する花を提供、自身が撮った写真を売りたいとインフォメーションに持参など、変化を感じることができた。

さらには、ツアーを学ぶ講座に参加してくれた。ゆうやくんが学びたいと思いアクションを起こし、人と話したい、と思うようになってきていることは大きな変化であり、そのことをきちんと受け入れコミュニケーションを取る地域と作家も受け入れの土台が大きくなっているということだと感じる。

### 【団体エコポリスのメンバーの増加】

波及効果の欄でも述べたが地域団体のメンバーの増加ということは非常に意義が大きいと感じる。中山間地域は関係値が固定化されてしまう濃密なコミュニティの中、「傍観者」が「参加者」になることの変化は市街地に比べてずっと大きいと感じる。そして、少しずつでも集落の中で参加者が増えていくことで、地域の担い手は年齢関係なく増えていくと考える。



### 【地域住民が表現する姿～ギャル達の集い】

抜里駅で活動を行う「さよばあちゃんの休憩所」は86歳になる諸田さよさんを中心に週末ごとにおそうざいなどでお客さんをおもてなししている場所である。この場所で自然発生的に「(昭和の)ギャル達の集い」が最終日に開催された。昨年は抜里八幡神社での公演時にコラボの要請があり実施したものを、今年は自分たちで自発的に開催したものである。平均年齢83歳、最高齢は90歳の女性たちが、「あんこ椿は恋の花」や「芸者ワル

ツ」などを踊ってくれた。アートは若い世代のものというイメージがあり、好き(わかる)人同士だけで語られる閉じたものになりがちな一面もあるが、常にひらき、受け入れることのできる、余白のある芸術祭でありたい。このことはアートプラット大井川を開催する理由と同様である。



## 事業に関わる人の多様性

### 【地域団体とサポーター】

芸術祭を開催する中山間地エリアにて、作家の滞在や制作協力をしてくれる層は 60～70 代の男性が多い。芸術祭ツールよりサポーター登録をしてくれる層は 20 代女性から 60 代男性まで非常に様々な年齢である。芸術祭に関わる層が男女とも非常に多様な世代ということは当芸術祭の特徴であると言える。

世代だけでなく、今期は福岡県や香川県、東京都と全国からサポーター活動をしてくれた。遠方からのサポーターは複数日、ヌクリハウスに宿泊しての活動をしてくれ、集落との関係や作家との関わりが非常に深いものであった。東京都から 5 日間にわたってサポーター活動をしてくれた 30 代女性がいた。彼女の動機は芸術祭がきっかけではなく、昨年台風 15 号が静岡県内を襲った際にこちらに滞在しており、足止めを食らうなどし、台風の被害を目の当たりにしたことで、困っているエリアのお手伝いができないか、ということがきっかけで当芸術祭のサポートに来てくれたという異色の経緯であった。緑茶が好きで静岡には来ていたということもあり、サポーター活動の先で茶農家が作品制作や芸術祭に深く関わっている様子を見て感銘を受けており、来年も来訪するよ、と話してくれた。会期前より毎週末、福岡より来訪しサポーター活動をしてくれた男性もあらわれた。



## 自立発展性に関するエピソード

### 【ホタルの森づくり】

抜里エリアで行われている「ホタルの森づくり」は昨年の台風で上手川に土砂が堆積し存続の危機であった。しかしサポーターや作家に呼びかけを行ったところ 70 名が集まり 1 日で川の復旧が完了した。

### 【ゲストハウス「ヌクリハウス」】

作家の滞在拠点をゲストハウスとし、作家だけでなくサポーター、一般の方等様々な人の受け入れが可能になったこと、また前述したように「ヌクリアートスクール」として学びの拠点と据えることで、新たな視点での取組や地域内での関わりしりが創出されていくと考える。今後は企業研修やワーケーションなど様々な用途を考えたい。ファームステイなどの話もあがりつつあるので、地域に根差した滞在プログラムの構築を図りたい。

### 【ハイキングルート】

こちらも前述と重なるが、ハイキングルートと作品設置という「抜里アート回廊プロジェクト」に今年度着手することができたことで、年間を通じての来訪者の受け入れやプロジェクトの構築が可能となった。ヌクリハウスの稼働と合わせて実施していきたい。

### 【作品管理を担う集落】

「さとうりさ／縫い合わせ」は集落のメンバーが天気や風を見て作品の出し入れを行う。「ヒデミニシダ／音の要塞」は作品の基礎のコンクリート部分は集落のメンバーが制作。「上野雄次／まつる」の山の持ち主への依頼は集落のメンバーが行う。など、作品制作の協力を超え、制作を分担するまでになっている。主体的に動いてくれるのは、抜里エコポリスのメンバーであるが、近年は抜里地区以外での制作も作家の要請があれば駆けつけてくれている。今回、青部地区での制作に来てくれ、青部地区の住民には大変刺激的だったようで、「こういう関わりがあるのだ。羨ましい」という声があがっていた。エコポリスの動きが他地域にも刺激となり、各地域の新たな動きとなっていくようコーディネートしていきたいと考える。

## 事業をめぐる新陳代謝に関するエピソード

### 【芸術祭コアサポーターの出現】

抜里エコポリスに新メンバー追加や抜里以外のエリア住民への刺激や興味喚起も大きな収穫であったが、さらにコアサポーターが出現したことも大きな成果と考える。

昨年、当芸術祭に初めて来訪し、興味を持ってくれた(通称)“てっさん”がいる。サポーター登録をしてくれ、そこから制作時よりほとんど毎週末ヌクリハウスに宿泊し、芸術祭のサポートをしてくれた。抜里エコポリスのメンバーにも受け入れられ、アーティストがデザインしたエコポリスのジャンパーを贈られるほどに。

芸術祭に、というよりは、抜里エコポリスの活動に深く関わるようになったてっさんのようなコアサポーターの出現は居住地を超えて地域の存続に大きな意義が今後あるのではないかと考える。

### 【さまざまな住民との関わり】

地域にて芸術祭を主に支えてくれる団体が抜里エコポリスであるが、今回、TAKAGIKAORU 作品会場となった空き家の持ち主や、抜里駅でのさよばあちゃんの休憩所のメンバー、抜里アート回廊プロジェクトではぼいんぼいん山に茶畑を所有する茶農家など、これまでとは違う新たな住民との関わりが増加した。丸山純子が2か月にわたる滞在制作を行ったことで、作家との交流が濃密になり、塩郷駅エリアの住民が来場者をお迎えするための花づくりを急遽、自発的に行うなど、芸術祭を支える地域の人々も多様な人、エリアが増えてきている。

### 【広域的な回遊の施策に向けて】

今回、JR 島田駅周辺を新会場とし、インフォメーションセンターを設けたことで、芸術祭に興味を持ったり、参加した層が市内の中でふくらんだ。これまでは島田市内の住民は「山の方でやっている取組だからよくわからない」というような声が多く、わざわざ足を運ぶ理由もなく来訪や関わりが薄かった。今回まちなかエリアを想定したこ

とで、実はこれまで一番関わりを持ちづらかった市街地エリアの市民の来場が目立つ結果となった。エリアの増加については予算などを鑑みながら慎重に議論を重ね、交流拠点の増加や回遊のしやすさなどとあわせて考えて、芸術祭を通じた参加や交流の間口を広げていきたい。

## 課題

芸術祭を取り巻く状況として、来訪者が開催エリアを目指し展示会場を回遊する際のアクセスの困難さがある。今年度実施にあたっては、鉄道および幹線道路などの運行状況の把握に非常に悩まされたが、回遊策として電動アシスト自転車のレンタルや専用車の運行及びガイドツアーを今回試験的に運用した。次年度以降に向けては、展示会場の設定のタイミングからアクセスおよび回遊を考慮したうえで計画していく必要がある。特に県外からの来訪者の増加が見込まれることから、アクセス情報などはWEBサイトなどを活用した広報コミュニケーションに注力していきたい。

運営においては、人的課題と、資金的課題があげられる。人的課題においては主催であるNPO法人スタッフのみでは運営が難しくなりつつある。県内外からのサポーターも増加しており、直近から開催期間の週末は人手が十分であったが、事務処理や通年で業務などはサポーターへの依頼が難しく、事務局における芸術祭担当者の設置等について検討していく必要がある。また資金的課題においては実行委員会制度なども含め引き続きの検討を継続していく必要がある。

## 今後の方向性

芸術祭の継続開催を目指していくとともに、通年で、アートを通じた地域との交流プロジェクトを令和5年度以降実施していく。子ども向けワークショップや回遊イベントなどの開催を実施していき、通年の中での参加者とのコミュニケーションを作ることで、芸術祭のサポーターの増加を図ってきたい。

令和5年度のアーティスト選定においては、レジデンスプログラムなどを含めたアーティストの公募に取り組んでいく所存である。作品等の展開は、来訪者の回遊性とともに、大井川流域地域の新たな発見につなげる取り組みにつなげていきたい。

また、前述のとおり芸術祭プロジェクトを通じて大井川流域地域の様々な価値を創出することができたと実感している。これら成果や現在までのプロセスを県内の幅広いプロジェクト従事者と共有していくかを検討していきたい。具体的には過去6か年の取り組みをまとめたWEBサイトの構築やパンフレット等の印刷物などの制作を検討していきたい。

## 08 協力団体・協力会社

多くの団体や企業の支援と協力を頂き開催を行った。(順不同・敬称略)

- ・一般社団法人島田市観光協会
- ・株式会社アートフロントギャラリー
- ・抜里エコポリス
- ・抜里町内会
- ・さよばあちゃんの休憩所
- ・有限会社川根茶めぐり園
- ・抜里アート回廊づくり協議会
- ・抜里八幡神社
- ・東京女子美術大学
- ・日限地蔵尊
- ・片川工務店
- ・島田駅前中央通り商店街
- ・株式会社大井川不動産
- ・株式会社中部営繕センター
- ・島田市博物館
- ・有限会社寿電気
- ・茶風花
- ・大泉院
- ・KM 会(くのわきみらいの会)
- ・NPO 法人越後妻有里山協働機構
- ・NPO サプライズ
- ・NPO 法人東海道吉原宿
- ・げんろく農園
- ・JUN 喫茶
- ・L.cat.coffee
- ・サンカク公園プロジェクト
- ・ふじのくに旬を食べつくす会
- ・マルイエしようゆ川根本家
- ・和信化学工業株式会社
- ・有限会社落合製材所
- ・株式会社すろーらいふ
- ・株式会社大村屋酒造場
- ・杉本製茶株式会社
- ・(株)朝日園
- ・であい農園
- ・寝装寝具みやち
- ・「アートプラット／大井川」プログラム参加の企業及び店舗・団体の皆さま

ほか多数の協力及び支援を頂いた。

# 09 広報

各種制作物としては、ポスター、公式パンフレットを制作した。ポスター、パンフレットは公共機関、全国の美術館に掲出及び配布を依頼した。ウェブメディアを活用するとともに、制作したPR動画は、SNSなどで放送した。その他、地域フリーペーパーを活用し開催前から進捗を伝えていく広報を行った。

## | 各種制作物 |

### ポスター



### ティザーチラシ



### スタンプラリー





地域情報誌 cocogane

12月号(キックオフイベント特集)



2月号(アートプラット特集)



3月号(芸術祭特集)



| ウェブメディアの活用 |

Facebook (イベントの告知や、写真や動画を用いたプロモーションなどを中心に発信した)

リーチ数: 9853 (28 日間で) 現在フォロワー数: 1038



Instagram (作品の魅力や風景の美しさを伝える画像をメインに投稿、ストーリーズを多用(動画、タグ付け投稿をストーリーズで紹介)発信、項目別のハイライトの作成、今回は有料広告を活用)

リーチ数: 3690 現在フォロワー数: 990



Twitter (Instagram に連携して投稿)

246 ツイート 現在フォロワー数: 179



| のぼり旗 |

のぼりは、駅や作品周辺などに掲出した

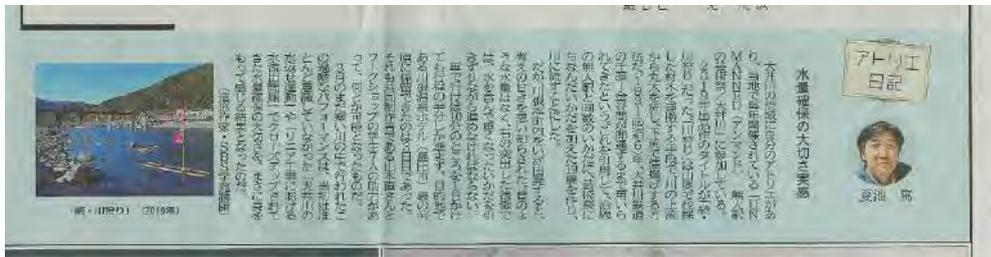


2022. 4. 8 藝術收藏+建築

2022.4.20 静岡新聞



2022.8.3 静岡新聞 夏池篤氏コラムにて



2022.8.4 静岡新聞

2022.10.19 静岡新聞



2022.12.18 静岡新聞

2023.1.2 美術手帖(2023年注目の国際芸術祭10選出)



20.23. 2.24 静岡新聞



2023.2.26 静岡新聞



2023.2.25 静岡新聞



2023.2.25 むるぶ



2023.3.6 THE JAPAN NEWS (読売新聞)



2023.3.1 静岡新聞

ふるさとふれあいインフォメーション

**大井川流域がアートに彩られる! 島田市**  
**UNMANNED 無人駅の芸術祭 / 大井川 2023**

美術手帖オンライン「今年注目の国際芸術祭」にも選出された、大井川鉄道の無人駅から広がる集落が舞台の芸術祭です。6回目の今回は「まちなかエリア (JR 島田駅周辺)」が登場します。抜里エリアでは作品を鑑賞しながら飯山ハイキングを楽しめる「アート回廊」がお披露目。大井川のうねりに沿い各所に赤い旗を立てる上野雄次「まつる」も必見! 大井川の食を巡るツアーなど公式イベントもおすすめです。19日(日)まで開催しています。

**NPO 法人 クロスメディアしまだ**  
 tel 0547-39-3666 fax 0547-39-3665  
 URL : <https://unmanned.jp/>

| パブリシティ実績 | テレビ・ラジオ |

- 2023年1月14日(土) k-mix「ケチャップのドバ☆ドバしずおか」
- 2023年2月23日 SBSラジオ「クローズアップマイタウン」
- 2023年2月3日(金)、3月3日(金) FM 島田「e ラジ」
- 2023年3月9日(木) トコチャン「トコチャンワイド」
- 2023年3月25日(土) 静岡朝日テレビ とびっきり土曜版

•

いのちを知る旅への杖として、

•

<旅ということ>

みなさん、抜里集落への旅に、ようこそお出でくださいました。  
きっと、「集落への旅？」と、少しいぶかしげに感じているかもしれませぬね。当然のことでありましょう。日頃から見慣れた、どこにでも在りそうな、一見なんのポイントもない、ごくごく普通の風景、集落の姿の、どこに旅というご自分を喚起してやまないものの実体があるのかと、疑問を感じることでしょう。

SNS の時代。絶景と呼ばれる場所を求めて殺到し、それを記録に留め、また聖地という秘なる空間に向かって意識を移動させることがすでに日常化している現実にあつて、見慣れた風景にはあまり目が届かなくなっているのも事実でありましょう。人間の意識は常に喚起の状態に向かいますし、その喚起の対象を、どこにもない独自に向けるのも、致し方ない志向なのかもしれません。

こうした中であえて集落、それも見慣れた対象としての光景に旅をするとは、一体どういうことなのかと少し驚かれるのも当前でしょう。しかしこうした問いには、大変大きなテーマが潜んでいるように感じられます。

ひとつは、その問いは、私たちの意識のベール（膜）をひっくり返してしまうような問いではないかと思うからです。「見える」、そこに在ると認知され、そのものが確実化され、私たちに取り込まれていく認知の機能を、この問いは引き剥がすようにして「見える」をもう一度私たちの前に置いていくのです。そうした作用を持つ問いだと思えるのです。見えるは常に、目の機能に沿いながら、そこにありありと実体が浮き上がらなかつたなら、対象そのものも「見える」の範疇に入らなくなるの

が現実です。そして、そうした表層の意識こそが私たちの日常であり、私たちはそのことに慣れ親しんでさえおります。習慣と言えばその通りなのですが、私たちは「見える」を目の機能にばかり置き換えているのが現実です。

しかし、そうした見えることの実際化にあって、ここでの問いは、「見える」ということを覆っている表層の膜を引き剥がしてみることこそが「芸術行為の目」ではないかと、私たちに促します。

私たちの目を覆う被膜を、一度ひっくり返してみる。そして、見えるという認識の行為を、もう一度からだの深層に委ねてみる。からだ、目の機能でもある見えるという実際を、ただそこに映ったものだけではなく、もう少し深まりを持った、見えないという断定を超えたものとして捉え、そのものの奥に隠されているものをも読み解いていく。そうした認識の行為が、「芸術の目」、きっと「見える」ということの本来なのではないかと、この問いは私たちに語りかけるのではないのでしょうか。

ですから、問いのひとつめは、私たちは芸術の目をすでに持っているのではないか。むしろそうしたことこそが、私たちの本来ではなかったかと、私たちに覚醒する問いとして捉えることができると思います。

少し、ややこしくなってきましたね。

しかし、ここ抜里集落への旅に訪れたみなさんは、もうすでに「芸術の目」を持って、そのことを働かせているのではないかと、このややこしさを楽しんでみていただきたいのです。

そしてこの問いは更に、もうひとつの大事なことを示唆するのです。

<集落ということ>

どこにでもあるような、なんの起伏もないような、普通の営みを淡々と見せるようなこの集落という場を旅するということは、一体どんなことなのかと、この問いは更に追い求めていきます。そうして、この問いに

含まれているもうひとつの深層は、実は集落とはどういう場所で、一体どんなことが人々を喚起して止まないのかという、集落というものを考える際の、それも「芸術の集落」を考えさせる、とても大事な視線が含まれているのではないかと思えるのです。通常、集落というものの実体を定義することとして、社会学や風土工学の視点、解釈が参照されます。

「村」あるいは「村落」とは、抽象的には、生産領域（田畑等）、居住領域（集落）、その他の領域（寺社等）の三者が社会的かつ有機的に統一されている一定の領域を意味する用語である。「村落」はその領域全体を意味し、「集落」はその村落内住民の居住地をさす。つまり「集落」とは「村落」を構成する一部分である。

—木村礎著「村を歩く—日本史フィールド・ノート」雄山閣出版

と厳密に分類されるのですが、ここでは「集落」という語をむしろ「像」のように捉え、想起される想像体としての居住の単位と捉えております。もちろん厳密な用語使用をなすべきなのですが、私たちの脳裏にある「集落」＝「村落」の漠然性を、慣習の言葉として、あえて採用いたしました。「もうひとつの集落」というイメージの喚起を損なわないためです。

さて、ここで、芸術の目の集落、「芸術の集落」ですね。

動かない、変わらない、いつもそこにずっと在り続ける、留まっているという状態に、ただただ従っているだけの、人々の居住の実体の集落と、芸術という変化することを旨とする、流動を促し続けるものの実体が、一体どのように結び着くのだという疑念、不釣り合いの感覚が生まれてくるのは当たり前でしょう。

ここに、この芸術祭では、集落という場に移動して止まないもの、逸脱して止まないもの、通常とは全く違ったまさに異化を誘発するもの、その場が差異の作用に満たされるような奇特の場面、状態を置いてみようとするのです。ああ、またややこしくなりましたね。でも、もう少しお付き合いください。

この芸術祭では、異化する作用（ズラすということ）を、集落の通常を揺るがしの状態にしてしまうものを、芸術の役割として、集落の普通に置いてみるのです。そして、こうしたことの導きの役割を負わせられたのが、舞踏、音楽、そうした身体が交差し合う芸術なのでした。そして、そうした中から見えてくる集落の深層の像に、もうひとつの集落、芸術の集落を見出そうとしたのです。

「もうひとつの集落」、そこには芸術の集落が存在していると問いを立ててみると、集落はただ集落であるだけでなく、私たちに喚起して止まないものに見事な集合の実体であると感じ合えるのではないか。「芸術の目」とは、そうした異化、通常の奥に、見えることの奥に、もうひとつの見えるが在ると確信できることではないかと。その証を、みなさんに芸術祭で試みていただきたいと、お誘いしたのでした。そしてそのことは、見るという目の機能を変化させたみなさんの認知自体が、もうすでに芸術の行為であることを、みなさんと共有しようとしたのでした。しかし、こうした異化の作用は、なにも現代芸術だけの作用では決してありません。日本の古代史においても、常に、定点に異化の作用を導き入れる交易、交流ということが行われていました。まさに古代の芸能の発生は、そうした作用の要求に拠って発生してきた、人間の普遍的な営みであったと思われます。

村々を訪ね歩く芸能者、念仏僧、門付け者、巡礼者。そうした遊行の人々が、古代にあってはむしろ異化を、異なるものを参入させるという役割を負いながら、かつ、共同体という集落が外の世界を積極的に受け入れることを必然としながら、むしろ、そうしたことが地域、集落を豊かに増幅させることであることを明かすように、異化を必然としたのでした。ですから、古代にあっては、異（異人）をむしろ招き寄せることが、その集落にとって健康な、望ましい発展の証であったのです。

この芸術祭は芸術という装置を持って、感性の交易、交流を果たそうと意図されたものです。そして、芸術の目を持って、集落やそれらを包含

する自然風景を見て下さいと、みなさんをお誘いしたのです。

さて、「芸術の集落」ということでしたね。異化の目に拠って映し出されたもうひとつの風景、集落とは一体、なんなのでしょうか。

私は、そこにひとつの仮説を立ててみたいと思います。集落とは一個の生命体ではないか、と。もっと、ややこしくなっていましたか。

否、集落を一個の生命、それも実に見事に練り上げられた、ひとつのいのちの統合、いのちの様の像、人や動物、植物といった生命体が密集し、闘ぎ合って内実を作り上げ、なおそうした内実を外、環境と場に解き放とうと意図している、密で精緻な像だと定義してみれば、それは私たちのかけがえのない一個のいのちと同じではないでしょうか。

集落が一個の生命体の凝縮のまとまり？と、更にややこしく、むしろ迷宮の淵に入っていくようだとお叱りを受けるかもしれません。

しかし、芸術の村とは、芸術作品が展示された村でも、芸術行為に参加している村のことでもありません。（そうした行為もあるのですが、）それはもっと素朴に、もっとからだの理に沿いながら、みなさんご自身が視線をズラシ、見るという限定を超えて、「見る」を異化の作用を持って、もうひとつの目の機能、見えるに入ること、まさに芸術への参入の場として集落を機能させる、そうした行為のことをいうのだと思えます。

普段見えていることの裏に、その奥に、もっともっと集落の違う風景を発見し、集落という場はただ留まり続ける場、変化しない場であるという認識から、集落の奥に隠れている深層、集落という記号で束ねてしまうのではなく、そこは一個のかけがえのない場でありながら、さまざまな現象を含んで、それを包み込んでなお多様なものの総合であるように、動き、変化し続けているいのちの場なのだと、私たちの認識をずらしてみるからこそ、「芸術の村」の始まりかもしれません。

ここで芸術論を述べていく余裕はありませんが、私たちは一個のいのちの歴史に生きています。そして、歴史に内包された「物語」という自己

自身のドラマ、自己自身の変異に生きています。私たちは、自分という「いのちの束（統合）」を日々更新し、日々変化させながら、それでもなお一個のいのちのまとまりとしての像に生きています。

この、私たちのいのちの像の変化の様をあからさまにしてみるものが、芸術という変換の行為に結びつき、私たちはそのことを披露せざるを得ません。そうです。芸術は私たちを覆う被膜を揺さぶり、私たちの目の機能をも揺さぶり、そこに全く違う私の像を見ることなのです。こんないのちの果敢なドラマが芸術だとしたら、なんとそのことは集落という、私たちを包んでいる環境の、私たちの存在を形作ろうとして形作られた集落の、実体と沿い合うことではないでしょうか。

そうしたことを、私（森）は、「慣習の芸術論」などと呼んでおりますが、このことは、芸術をただ現代に直結した新しいもの、変化するもの、更新されるものの顕れとするだけでなく、むしろ留まり、そこに在る続けるものの奥に、残ったもの、小さく閉じてしまったかのように見えるものの実体に、積極的に見出そうとする「生の芸術」（アールブリュット）に近いものでありましょう。

ですから、集落という実体は、芸術的な感性を喚起するものでもないように思えますが、私たちの視線をズラしさえすれば、それは芸術の行為と位置付けていい、多様で魅力に満ちた、実に内実の豊かな自然の、人為の造形物であることが分かってくると思います。

そしてその内実は、いのちの華やぎのように盛んに活動を促し続ける、たったひとりのいのちの物語が、集合し、ひしめき合い、かつ統合される形で合意形成された芸術認識の、知恵という純粋価値が遊動し合う、そうした異化も平易も容認した全体像、芸術の形・像であることが分かってくると思います。

「芸術の集落」とは「いのちの集落」であったのかもしれませんが、こうした仮説を一度お通りになって、この抜里全体を、そこで繰り広げられる邦楽の演舞を、また舞踏という身体の芸術を拝見していただく願いを持って、この公式ツアーを企画いたしました。

<言葉の杖>

この旅には、「言葉の案内人」が同行いたします。

早川知子さんという民俗誌の研究者が、抜里集落に先行の旅を実施し、丹念に歩いた記録の束を携えて、みなさんをご案内申し上げます。そう、巡礼にも「同行の杖」があるように、みなさまの旅（もう巡礼のようですね）にも「言葉の杖」が同行いたします。

この杖はやはり古代において、異人（神の変化の像）が必ず携えてその場に訪れるという交流、参加、開示の徴である神聖具なのですが、知子さんはこれまで私（森）とともに、こうした民俗の旅、集落の深層を掘り起こし、そのことを人々の前に明らかにしようとしてきました。建築を専門としながら、民俗といういわばあいまいで深層を顕すことが少ない、そこに留まり続け堆積していった、それこそ「いのちの層」と呼べる「いのちの痕跡」を読み解こうとしています。

そしてなにより、そこに存在する痕跡を、「いのちの残存性」を循環させるためのツールとしてみようかと努めているのです。このことは、そこに在るものを活かそう、そこに在るいのちの集積を繋げようと、自らの視点（見ること）を揺るがすことです。

揺るがすとは、存在を固く閉じたものとして取り出すのではなく、そのものは柔らかく変化し、いつでも、どこでも、他のことに繋がる可能性を持つのだと、その集積を愛でることでもあります。そんな態度と柔らかかな感性は、その事物のもうひとつの現実を透視させ、内実を顕していこうとする、むしろ芸術の行為として見ようとしているのです。

私はそうした手法を、なにかとなにかを繋ぎ、特質を際立たせようと意図する、「中間の存在者・像」と感じてきました。（民俗学者の柳田國男は、重層していく人と人との関係を解いたり、接着させたりする、そうした存在を「妹の力」として論考しました。）

民俗社会（集落の像）を見渡してみると、社会の構成のさまざまな場面にこの中間に位置する者を配置することが、その社会を柔らかくかつ機能的に、豊かさを生み出す母体であるようにつくり上げている、それこ

そ知恵が無数に結ばれていることに気付きます。風土という場面を造形することは、こうした中間の者が孕んでいる知恵を、その場に転化することでありましょう。

この調査書には、そうした民俗社会の知の総和が散りばめられています。私たちはそのどれからも、どこからも、もうひとつの視線を取り出せばいいのです。ですからまさに、杖であります。

ここでも、どのように解釈されてもいい、むしろその可能性を帯びた言葉の杖を書いて下さいました。そして集落への旅に同行し、道々言葉を述べていきます。その言葉の群れを携えながら、抜里の集落を巡ってみてください。

きっとこの旅は、みなさま方ご自身が、みなさま方の「見える」で、みなさま方の「いのちの層、糧」を愛でる旅かもしれません。「無人駅の芸術祭」という芸術の装置は、そうしたことを学ぶ学校のような役割を持っているのかもしれませんが。

では楽しんで、行ってらっしゃい。

「大地懺悔」遊行図絵  
(2023年3月12日)

第一踏

一抜里八幡遊行図譜一

第二踏

一白昼夢譚一

第三踏

一河原御仏抄一

尺八 武田白龍  
(普化宗尺八師範)

三味線 澤田邦弦  
(津軽三味線名取)

舞踏 森繁哉  
(田楽舞踏)

いのちを知る旅への木杖として、

・

早川知子

## 1. 川根に人が住み出した頁



3000 m級の山々を水源とし、V字溪谷をつくって流れる大井川。上中流域である川根地方では、原初の暮らしが長く続いた。古くは大和民族に平地を追われた先住民が移り住んできたという説もあるほど。抜里と家山とを隔てる伊奈山の作場で、俣平久作さんが茶畑の畝を起こしていると、鍬になにか硬いものがあつた。土の中からは石器がまつまって出てきたという。こんなふうには、この地で石器類や土器が発見されることは珍しくない。家山や身成の段丘上の平坦地にも、縄文中期の遺跡が認められている。抜里にもいくつかの高台があつて、まずはこのような段丘上に、人々が住み着いたのだろう。



### 後に移り住む者

古代において、大井川はすでに国境をなしていた。ここ中流域でも、両岸は別の郡に属していた。大和からみて「遠い淡海」を意味する遠江。その最東端にあたる大井川は、まさに文化の果つるところであった。

しかしこの山間の地にも、ささやかに、西から隠れ住むように移ってくる者たちがいた。抜里の地名の由来の一つとして、奈良期に御栗に隠棲した官人がいたことを伝える古事もあるという。

やがて中世に入ると、当地は後白河法皇の関係する荘園の一つ、山香荘に組み込まれる。山険の地形は戦の要害にも利用され、流域には戦乱の世に争いを逃れて移り住む者もいた。山間の地に安寧を求め、中には、後に武装農民として土地を治めた者もいたという。

「かいと（垣内）」という言葉がある。「後に移った人々が群れ住む」ことを意味するこの言葉は、大井川流域に特に多い。抜里集落にも、山海戸、東海戸、市場海戸、西海戸など、いくつかの「かいと」が屋号や字名に存在する。

### 無縁者を尊ぶ

架橋、渡船を禁じられ、近世の大井川はますます国境の意味が増していく。しかも山の中を南北に通る道は、峠越えの道なき道。馬の通行も困難なほどで、物の運搬はもっぱら人夫に依存していた。

抜里を通る街道も、山崩れのために新道ができる前は、今の集落のはるか上方を通る尾根沿いの道だった。そのため、明治になって渡船が許されるまでは、森や掛川など東西との結びつきの方が強かった。

峠越えの道には、道祖神だけにとどまらず、無縁仏や塚、行き倒れの人を弔う供養塔も少なくなかった。

「昔、ある信神（神職）さんが言った。抜里の山々にある五輪さんを丁寧（とうじん）に祀る（まつ）ように。そうしたら祟（たた）りも減（減）って体も強くなる、と。たしかに、絵下原のうちの作場には五輪塔が見つかったそうで、道場原にも今の井名（い）の五輪さんが見つかった。堂山（どう）や寺山（てら）からも出てきた。五輪さんはちょうど村の四方向から、村を守ってくれているのではないか。」杉村実平（すぎむらみへい）さんはそう話す。

この、「五輪さんを丁寧（とうじん）に祀（まつ）れ」という教えには、無縁（むげん）や無名（むな）の人をも慈（あは）しみ尊（た）ぶ、この地ならではの性格が表れているような気がする。



## 2. 川根は、朝霧に包まれる



2023年、2月。抜里に滞在して最初の朝。昨夜の雨が影響し、窓の外には朝霧が立ち込めている。茶の葉が露に濡れる。

しかし最近では、大井川の水量が減った影響で、朝霧がうんと減ったという。春には毎朝のように霧が上がっていた川根の風景も、今では今日のような雨上がりの日に見られればいいほどになってしまった。

川根では古くから、大井川流域の地域特性を生かしたお茶づくりがされてきた。茶の葉は昼間に光合成したものが夜になって蓄えられるため、適度な日射時間が必要だった。V字谷は日射しをほどよく遮り、おまけに雨水も停滞させない。土壌においても砂岩の多い丘陵地帯は、風化すると礫質になるという、茶栽培にはうってつけの場所だった。

### お茶が根付いた背景

そもそも、お茶は修行僧が眠気覚ましとして飲んだのがはじまりという。農家においても、はじめは薬として家の近くに栽培された。医療の発達しない山間においてはなおさら、茶は貴重な生薬だっただろう。

この地では、かつて焼き畑がさかんだった。急傾斜地の環境のもと、森林に直接火を入れて草木を焼き、その灰を肥料とするその農法は、この地に合っていた。焼き畑地は茶栽培と相性がよく、その分布は重なるという。それだけでなく、焼き畑はコウゾやミツマタの生産、炭焼きなど

の生業などとも結びついていく。

製茶はこの地の自然条件とうまく結実し、工芸作物として根付いていく。茶葉の生産のみならず、各農家での手揉みの技術の発達とあいまって、川根茶の名は全国に広まっていった。

### 茶草場、山と里との境界

中屋始さんは、小学校高学年の頃からお茶の手伝いをした。刈った茶の運搬や、生葉を蒸し機に入れる仕事だった。茶休み（農休み）はちょうど八十八夜の頃。この時期のお茶は希少のため、どの家も競い合うようにお茶摘みさんと呼んだ。中屋さんの家では2、3人ほど。普段茶栽培などしない平野部からきてくれていた。

お茶は、新芽を摘んだ後に整枝することで、美味しさが保たれる。苗木を植えて、2年目に枝を横に広げる。3、4年後に摘採ができるようになり、樹高が高くなると台切り更新することで再生されるという。

茶畑は最初、耕作しづらい山間部に拓かれていった。平らな場所は霜害もあるし、平野部の耕作はやはり米や野菜が優先された。抜里でも「東原」の山の斜面には、今でも山石を見事に積み上げた、段々状の茶畑を見ることができる。

そして、急すぎて茶も栽培できないような山の斜面は、茶草場（ちゃぐさば）として利用してきた。「昔は、茶畑と山との間には茶草場があった。その茶草場は、人と動物との緩衝地帯にもなっていた。」と、中屋さんは話す。



東原の茶畑に残る古い石積み



茶の苗も茶草（笹）で覆って露に濡らしている

茶草とはススキや笹のこと。秋から冬に刈って乾燥させて、冬に茶畑の畝に敷いておく。ススキが腐食すると土は肥えてふかふかになり、茶の味や香りを良くする。

茶草場は、農家における「茅場」や「草刈場」。茶栽培をするずっと以前から、田畑の肥料、牛や馬の飼料、茅葺屋根の材料と、農業や生活に欠かせなかった。炭焼きのさかんな抜里では、炭俵を作るにも大量の茅が必要だった。炭焼きをした雑木林が、やがて材木出しの杉や檜へと入れ替わっても、苗木が育つまでの7、8年は草刈場として利用できた。



昭和50年代から30年ほどはお茶の好景気で、農地はみな茶畑に転換した。防霧ファンができて川の近くでも栽培できるようになり、区画整理された茶園が広がった。山側にも侵食し、ついには山林の際まで達した。そうして茶草場は失われ、最近では動物が下りてくるようになった。山側の茶園は、少なくとも樹齢4、50年目を迎える。茶樹の老木はおおよそ30年をめぐりに抜根し、植え替えなければならない。しかし、これだけの茶の木を植え替えるのは容易ではない。

まず放棄されていくのは、機械の入りにくい山地の茶畑。茶の木は放っておくと数年で野生化する。かといって、生きものが好むような実が成るわけでもない。

大井川の水が減って、川霧が立ちにくくなった。その上「深蒸し茶」の開発で、平地でも美味しいお茶が生産されるようになった。そもそもお茶の需要自体が減って茶価も落ちている。「川根らしい」お茶をつくらうという思いも、少しずつ薄れようとしている。

### 3. 水や、木々のとり入れ方



大井川の支流のひとつ、上手川沿いを歩いてみる。

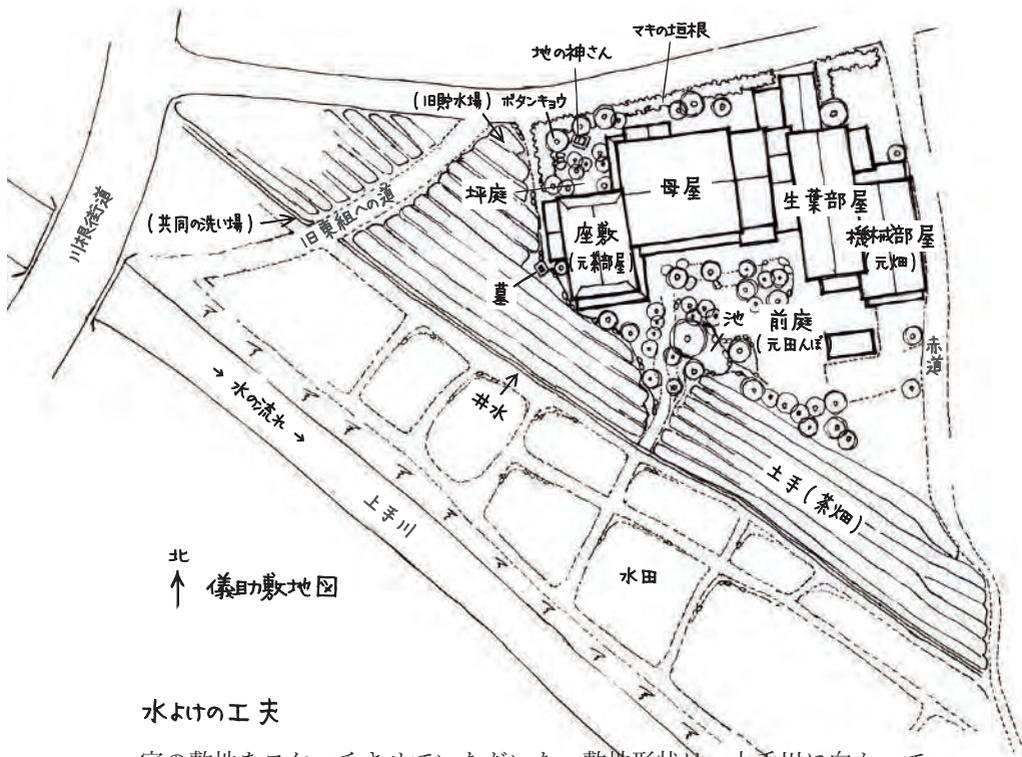
畦道や水路は小石で区切られている。肩幅程度のその道は、土地の起伏に沿ってゆるやかに続き、おもわず走り出してしまう。その小石は、家の敷地や茶畑の間にも並んで、境界をなしている。

とある家の屋根が見えてきた。上手川からは、その敷地を守るかのように入手がこんもりと築かれている。その一部が切りとられ、小道は家へと続いている。屋号「儀助」、小玉貞夫さんのおうちだ。

上手川はしばしば氾濫し、かつては水との闘いだった。おそらく昔は、水害のたびに川除普請がされてきただろう。

そしてその氾濫原を利用して開墾し、人々は水田を築いてきた。どこを見回しても一面の茶畑に覆われる抜里において、この沢沿いの田んぼは貴重だ。昔は20軒くらいが米を作っていたが、今、上手川沿いでは儀助の家だけとなってしまった。一反五畝ほど残っているという。

上手川沿いには土手が築かれ、昔は竹藪が生い茂っていた。戦後、川は整備され、竹藪は切られてしまった。氾濫はほとんど治まり、敷地を囲む土手の機能もほとんど失われてしまったが、昨年の大雨のときはこの土手の効果を実感したという。



### 水よけの工夫

家の敷地をスケッチさせていただいた。敷地形状は、上手川に向かって舟形をしている。これはいざという時の大水に備えた構えだ。氾濫の衝撃を和らげるために、川側は土を土手状に盛り、反対側は石積みとマキの垣根を植え、先端の坪庭部分を盛り土している。坪庭にはボタンキョウの木と地の神さん、座敷の西側では先祖の墓が、それぞれ家を見守ってくれている。同様の敷地形状は、集落内の2つの沢筋に、いくつかの旧家で見られる。



上手川側から見た敷地、茶畑が土手を囲んでいる



先端部を含めた北西側の巨根は、風よけにもなる

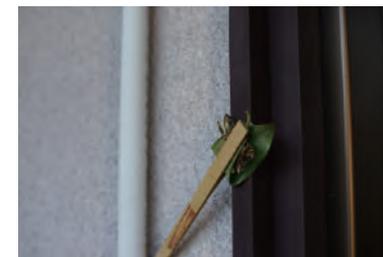
### 坪庭、草木と祈り

坪庭は昔からあって、母屋と離れ座敷から眺められる一番いい庭だった。ミカンやグミの木が生えていて、小正月には「成るか成らんか、成らなきや切っちゃうぞ」といって豊作を祈った。



地の神さんにサカキを供える

そのほかにも、庭の草木にはいろいろな祈りが込められた。普段は香花として仏さんに供えるハナンバは、節分には焼いたイワシの頭、生のニンニクの葉を包んで、母屋や茶部屋など各戸口に飾って厄除けする。節分のもう一つの行事「カゴ」。ハナンバを入れて庭に立て、酉の日に身内のいない方向に倒した。村中親戚だらけなので真下に下ろした。クチナシの実には黄色の色素がとれて、桃の節句の時、菱餅に色を付けた。ミツマタやカンゾウは和紙の原料。山から採ってきて、田畑や家の近くに植えておいた。母親が皮を剥き、父親や祖父が紙を漉いていた。



節分の日に玄関に飾る「やいしがし」



文字通り三つ枝分かれするミツマタは、庭木として育てやすい



「カゴ」は、酉の日に真下に下ろす

## 前庭、自然を内にとり入れる

貞夫さんは趣味で20年ほど前から前庭作りを始めた。家の前にあった田んぼを埋めたてて、山や川にある資材にならないような石をもらっては、運んできた。

ウメ、サルスベリ、ミヤマツツジ

…。山から見つけてきた木々も、季節ごとの花を咲かせる。まるで川根の植物園だ。土手の茶畑は、新芽の頃には鮮やかな黄緑色に覆われ、庭園を包み込んで借景のようになる。

自然を内にとり込むかたち。貞夫さんは暇を見つけては、庭技の剪定にいそしんでいる。労をいとわない。むしろ手をかけ続けることに意味がありそうだ。それはまるで、工芸作物としてのお茶がこの地に根付いたことを物語るかのよう。



ほとどりの前庭も、土手の茶園が包み込む



石の形をいかした鑑賞池と、シダレウメ



鑑賞池には井水を引込み、泉水としている



常緑性のアセビの木は2月に花を咲かせる

## 水への敬意

「井水（いえ）」と呼ばれる水路が、貞夫さんの家の前を流れている。なんとも、水への敬意が伝わるような呼び名だ。水道が引かれる以前、この水路は集落にとって大切なものだった。

まず、飲み水を得るのがとても大変だった。山を背にする旧家では、直接湧き水や沢水を得られたが、平地に増えていった分家では、豎井戸を掘るか、または山から樋を継いで引いてくるしかなかった。ここ東村でも、八幡神社の裏から引いて一度溜め、さらに竹樋で各家に引き込んでいた。貞夫さんの家ではこの水を紙漉きにも使った。



左上手川、右に井水と、川石を並べて分岐する



杉木立の中、山裾に沿って井水は走る

生活や生業に必要なその他の水は、「井水」から得ていた。この井水は、川の上流で川石を並べるように分流し、さらにその先に大きな川石を置いて、勢いを直接受けまい工夫している。

その後井水は杉木立を抜け、山裾に沿って流れていく。水路はよく手入れされていて、水は驚くほど透き通っている。幅は肩幅程度、深さは15cmほどだろうか。昔は赤土で底を突き固めたり、側面に石を積んだりして整備した。周囲の杉木立が、さらに水路の脇を固めている。

やがて井水は集落へと抜けて、各家の敷地の間を通る。ある家の庭先では、一部を四角くくり抜いて洗い場としている。街道が交差する辻の部分には、共同の洗い場もあった。野菜を洗ったり洗濯をしたりと、いつもにぎやかだったという。その先は畦道と平行に通り、農業用水として水田に引き込まれている。貞夫さんの家でも井水を敷地内にとり込み、前庭の鑑賞池の泉水として利用している。

## 4. 石と精神性



今の大井川は、川砂利がどこまでも広がる特異な景観をもつ。それはどこか、枯山水のような静寂的な美しさと、そしてどこか、賽の河原のようなもの悲しさを感じる。しかしこの光景は昔からのものではなかった。天野得司さんが20代の頃は、大井川のダム建設問題で保全運動がさかんな時期だった。青年団団長、漁業組合員でもあった天野さんは、「大井川の水を守る会」に積極的に参加していた。

南アルプスの伏流水は、かつてはそのほとんどが大井川に流れ込んでいた。不純物の少ない伏流水は、流域全体に恵みをもたらしていた。

ダム建設後、その水は上流域で取水され、大井川の流量が大幅に減少し、地下水位が下がってお茶栽培にも影響を及ぼした。かつては鮎のヤナ漁をしていた抜里にも、魚がのぼらなくなった。生態系は循環性を失いかけている。川の枯渇は、心の風景の枯渇にもつながっているだろう。

大井川の川原石はわずかに青みがかかった灰色がとても美しい。硬くて丸みがあってサラサラとし、急流に洗われて独特の風合いを持つ。

流域の人たちは、その川原石に意味を込め、拾ってきてはお祀りした。水神さん、山の神さん、地の神さん。抜里の人たちは親しみを込めてそう呼ぶ。シンプルで大井川らしい言葉の響きだと思う。それらの神々をたどることで、人々の川への思いに少しでも触れられないだろうか。

## お墓と地の神さん



地面（ぢづら）に並ぶ墓石群



今は茶畑の片隅に残る、杉村家の墓

抜里集落を見下ろす位置に、とある墓石群がある。楕円形をした川原石が、寄り添うように並んでいる。苔むしてはいるが、誰かによってきちんとお花が手向けられている。

その昔、家族の誰かが亡くなると、川原石を拾ってきて仮のお墓をつくった。杉村実平さんが子どもの頃もその風習はあり、拾う時は足で蹴り上げろといわれた。川原石には目があって、その目に沿って整える。基壇を積まず地面（ぢづら）で弔うのは、土葬していた名残だという。

墓のつくりっこが流行った時、それぞれの家のお墓は整理されて、堂山の墓地に集められた。立派な基壇に、家紋を刻んだ墓石群。しかし旧家を訪れると、家や畑の片隅に残された墓を見かける。杉村家の旧宅地にも片隅にはお墓が残され、かつてそこに住んでいた証を伝えている。

実平さんの家では、屋敷を見下ろす位置に「地の神さん」を祀っている。地の神さんは家を守ってくれるから、敷地の一番高い場所で祀るように言われてきた。亡くなって50年経つとそこに入るのだそう。

地の神さんの横には難を転じるナンテンが植えられ、その傍らに隠れるように、丸い石と馬のようなかたちの石がある。やはりこれも、昔亡くなった誰かのものなのだろう。



石ころのよび見落し行な墓石

## 山の神さんと、権現の森

名木山を抜けて沢沿いに遡っていくと、杉林の中、そこだけ雰囲気がちがう場所がある。シイや杉の自然木に囲まれて、いかにも鎮守といった様子だ。

権現森。実平さんは子どもの頃、この森によく遊びにきた。シイの木の根元に祀られているのは「権現さん」だ。

この祠を世話するのは、屋号「山海戸」。山海戸はほかの旧家とはまた立場のちがう、集落の周囲一帯の山を世話する「山の管理人」だった。ある時代にそれらの山を手放さざるを得なかったが、名木山にあるこの権現森だけは残した。持ち主の兒玉徳治さんは、お正月には必ず来てお祀りしている。山を守る精神は、そのまま息づいている。やはり昔は丸い石をご神体としていた。



杉村実平さん



シイの太木が残る、権現森



権現さん

一方、山々を背にし、旧家が並ぶ位置に鎮座する村社抜里八幡神社。境内のやや奥には「山の神さん」が祀られている。大井川の川石で積まれた亀の甲積みの基壇の上に、小祠が座っている。その傍らに祀られる岩石の芯でできた丸石は、こちらが元の山の神さんなのかもしれない。

山にはみんながお世話になった。炭焼きに、木やんぼう（材木出し）。草も薪もすべて山から得た。

山の神さんは山の幸によって生きる神。3月の祭礼には仕事を休んで賑やかにお祭りした。今でも実平さんら有志によって行われている。



山の神さん、亀の甲積み



傍らに据えらるる丸石

## 大頭龍さん、流れついた神

静岡県菊川市加茂地区。高台に鎮座する大頭龍神社は、遠州のみならず、駿河から三河にかけて広く参詣されてきた。この神社の奥の院には、ある自然石が祀られているという。

抜里集落、市場村。この菊川の大頭龍さんについて、いくつかの逸話を聞いた。あそこの大頭龍さんは、もとは市場村に祀られていたもので、大井川の大水によって流れ着いたのだと。はたまた、武田信玄によってこの地から菊川に遷座されたのだと。その石は白くて蛇のような変わったかたちをしていて、登鶴沢の上流から流されてきて市場村にたどり着いたのだと。

上流から流れついた見慣れない石に、特別な思いを感じて祀った。この話には、山あいに住む人々の、上流に対するあこがれや畏れのようなものが含まれているのではないだろうか。ちなみにその上流部は、「水晶薙」と呼ばれているという。

実際、菊川の大頭龍神社は昔から抜里と縁深く、祭礼の日には特別に抜里の人々が招待され、来ないと神事が始まらなかったそう。菊川の人々の、さらに上流を尊ぶ気持ちが、そうさせたのではないだろうか。

## 水神さん、水辺の要

登鶴沢は、かつて伊奈山の裾野に沿って蛇行し、集落の南に入り江をつくっていた。ここは明治初め、抜里の人々にとっては悲願となる舟着場ができ、多くの物資と人が賑わった。しかし、沢と大井川の



井名の舟着場跡には、目印となった岩が残る

合流部である「井名淵」は水深が深く、普段でも渦潮ができるほど。事故も多く、洪水時には辺り一面水浸しとなった。伊奈山の中腹には松の根本の岩の上に、地蔵が祀られていた。

一方、大正頃に集落北側にできた綱繰舟着場も、その名が示すように、舟をたぐり寄せた場所であった。船頭宿もあり、大井川鐵道が開通した後も対岸とを結ぶ渡し舟が出ていた。山が突き出た竹藪にはやはり地蔵を祀っているが、ここはかつて八幡神社があった場所だという。

大井川下流部の横岡や牛尾は、大井川の瀬替え以前には本流が激しくぶつかっていた地域。崖の上には水神社が祀られている。川が平野に流れ出るそんな場所は特に、水神が籠るとして崇められてきた。

抜里でも、かつての大井川が蛇行して流れ出ていたその根本部分に、水

霊を見出したのではないだろうか。石を彫って水の怒りをなんとか鎮めようとした。

そしてその石は、土地を守ってくれる要石のような存在だったのではないだろうか。



綱繰のお地蔵さん



井名の地蔵さんは今は堤防の上に

## 5. 祭り、寄り合い

兒玉ヒサさんは昭和4年生まれ。大井川近くの「島」という家に生まれ育った。ヒサさんから聞かれるのはいつも、楽しかった子どもの頃の思い出。

あの頃は川で遊ぶのが一番楽しかった。7月の「祇園」の頃が川開き。同級生たちと朝早くから行って、お昼を食べてからもう一度遊びに行った。

8月9日は「九日の晩」といって、お薬師さまの夜祭りだった。ちょうど三番茶の頃だけど、早めに帰ってきてお風呂に入って、浴衣を着て出かけていった。お盆の頃は、仏さんも川にいるから、泳ぐのはなんとなく怖い気がして、川遊びはその頃で終わりだった。

10月16日の秋祭りは、駆け足で帰った。子どもの好きなようなお菓子を出店で買うのがあんなにも楽しみだった。12月1日はお日待ち。お餅をついてあんこをつけて食べた。特別なことはないけど、親がのんびりしているのがなんか嬉しくって。

2月17日はお観音さんのお祭り。学校を急いで帰って、よそ行きを着ていった。境内がにぎやかで、女子青年団もおでんを出していて。お小遣いでおもちゃなんか選ぶのが楽しかった。



ヒサさん

### お披露目のようなもの

そんな話を聞いた後、今回の抜里滞在の最終日は、ちょうどその観音祭りの日だった。万福寺の裏手にある観音堂では、梅花講員さんらによる御詠歌以外は、特別なことはされない。けど、にぎやかだった当時を記憶するおばあちゃんたちが、普段より少しきれいな格好をしてお詣りにきていて。なんだか微笑ましい。新嫁っ子の時は、観音祭りの日に晴れ着を着てお詣りした。お披露目のようなものだったという。

万福寺の境内に公民館ができてからは、そこで結婚式もした。葬儀には親戚や隣保班みんなで手伝い合った。男性が葬儀の準備をして、女性は煮炊き。分家が多い家では100人分のお膳を並べる時もあるが大変な騒ぎだった。ほかにも、青年団や婦人会、村の寄り合い。集まる場面はどんどん減ってしまって、楽な分、やっぱりさみしい。

## 踊りにゃ損々、抜里人衆

抜里衆はとにかく踊りが好き。秋祭りといえば演芸会だった。神社の境内に仮の舞台をつくって、青年団が踊りや劇、歌舞伎なんかを披露した。全員が素人で、伝統として残そうなんて誰も思っていない。ただハレの日の祭りとして楽しみにやっていただけだった。出雲の安来節が祭りの定番として定着したもの、この辺だと抜里ぐらいじゃないだろうか、と中屋始さんという。



「抜里人衆」なんて言葉がある。ほかではあまりされない呼び方だ。周囲を寄せ付けられないほどまとまりがあって、人の多い部落と張り合っても負かすくらいだった。抜里は分家筋が増えて栄えた。限られた土地の中で生きる方法として、炭焼きが一番有効だった。抜里といえば炭焼きが連想されるくらい。暗いうちに家を出て、暗くなってから帰ってくる。そんな生活を昭和40年代までしていた。昭和20年頃までは「無尽」もあった。気心の知れた仲間10人くらいでやる助け合いの仕組みで、抜里の無尽は確実だと有名だった。「抜里魂」という言葉もある。お祭りや寄り合いのエピソードからは、抜里の人々の実直さが結束力へとつながり、時として遊びまでも皆で本気でやることにつながっているような気がする。



・抜里の調査によせて

「越すに越されぬ大井川」。江戸時代の川越のイメージが強い言葉だが、中世、古代に遡っても、大井川は国を分かつ川であった。かつ、険しい山々に囲まれた川根地域は、西側の国からしたら最果ての印象があっただろう。

古くは大和民族に追われた人々が辿り着いたという説、その後は西の文化をまとった人々まで、それぞれの事情がありながらここにたどり着き、しかし希望を持ってこの地を開拓しただろう。そしてそのたどり着いた先には、大井川の川原石によるプリミティブな文化があった。

抜里の段丘上にも、多くの川原石が出てくるという。その石を、昔は様々なことに使っていたはず。そして、石による信仰も生まれた。石に依り集まる人々。今回の旅は、俣平久作さんに見せていただいた石器から始まった、石を巡る旅でもあった。

そして、焼き畑文化も見逃せない。焼き畑は、大井川では特に上流域で行われていた印象が強い。しかし中流域の抜里でも、江戸時代に近隣の村とともに焼き畑の許可を嘆願した記録が残っている。焼き畑は輪作によって行われる自然農法。土地や自然をよく読み、工夫して行う農法だ。それと、工芸作物であるお茶栽培がどう結びついていくのか。それぞれのテーマをとっても、そこには途方もない広がりがある気がする。

久作さんの石器、中屋さんに見せていただいた喫茶養生記。実平さんや、鈴木曠雄さんから見せていただいた古地図。地域にはそういった資料が残るし、皆さんの中にも様々なエピソードがありそうだ。皆さんの助けを借りながら、表層のひとつひとつを剥がすようにして、この地域の深みにほんの少しでも近づいていけたなら。そんな希望を持って、今回の旅を終えようと思っている。

2023年3月 早川知子

『いのちを知る旅への杖として、』（2023年3月12日）

著者：早川知子

建築士。新潟県で「風土研究室」を立ち上げ、暮らし、地域、自然の関係性を調査研究する。現在国内を旅しながら、各地の風土や事象について採集するフィールドワークを実施。

取材協力（敬称略）：

杉村実平、中屋始、小玉貞夫、天野得司、俣平久作、兒玉ヒサ、  
ほか抜里集落の皆さん、鈴木曠雄

参考文献：

武市光章「大井川物語」（昭和42年）、  
野本寛一「大井川－その風土と文化－」（昭和54年）、  
田村保寿「満家山三光寺と町の伝説」（昭和55年）、  
角川日本地名大辞典 編纂委員会 竹内理三  
「角川日本地名大辞典 22 静岡県」（昭和57年）、  
鈴木龍平「明治大正時代 抜里の話」（平成3年）、  
大石孝 「大井川の周辺と農村の移り変わり」（平成8年）、  
赤坂憲雄「境界の発生」（平成14年）、  
野本寛一「神と自然の景観論」（平成18年）